

第四六話

「ちよつと、話が違うじゃない」

桂花さんは真境名の腕の中でもがきながら、彼を必死に非難するが、真境名は全く動じない。彼は彼女が暴れるのを力で押さえ込み、「うるさい女だな。これだから、ガキは嫌いなんだ」と吐き捨てる。

「死にたくないなら、大人しくしろ」

真境名に銃を突きつけられ、彼女は激しい抵抗を諦めた。

米利刑事はその様子を見ながら、悔しそうに地団駄を踏んだ。

「ああなるつて、分かってただろうに。どうするんだよ、おい」

米利刑事はそう言いながら、僕の方を見た。僕の顔を見られても、なんともしやうがない。真境名が約束を反故にして人質になるだけなのは、彼女にも予想がついただろうに。自分の手が真つ赤になるのも構わず、僕の頬を張り飛ばしてまです向こうへ行つた彼女の考えが、僕には全く分からない。

上の方で、一瞬光が走った。心を不安にさせるあの音が、頭の上で鳴り響く。屋外で雨粒を浴びながらの雷は、流星にちよつと怖い。一瞬ビビったのは僕だけではなく、織林刑事や、真境名の下にいる桂花さんも、身体をかがめた。光から頭を背ける。

真境名は桂花さんの頭を撫でながら、彼女を落ち着かせるためか、何やら言葉をかけている。もつとも、彼女の顔や嫌そうな反応を見るに、その声は逆効果なようだ。

僕は、徐々に雨脚が強くなり始めた空模様にも気を取られた。

「どこ見てんだ。集中しろ」

米利刑事の声に、反射的に「すみません」と答え、大人たちの話に混ざる。

「時間もあんまりないぞ」

米利刑事は腕時計を僕らに見せた。まだ一時間もあると思っていたのに、あつという間に、残り時間は三〇分を切ろうとしていた。何かに気を取られて、ボサつといている暇はない。

織林刑事は、向こうの方でふたりの世界に入ろうとしている真境名と桂花さん

に視線をやった。

「なんとかして奴を排除したところで、無駄なんですよんね」

織林刑事の言葉に、米利刑事が渋面を作って頷いた。今から応援を要請して、アイツが生み出した「予備」とやらを全て排除するのは難しい。そもそも、どこにどんな形で潜伏しているのかも、明らかにになっていない。

凍結申請が、「送信完了」から先に進まないのは、僕より上位の有資格者、真境名が居るから。予備とやらも、恐らく同等の存在なのだろう。彼は、桂花さんのことを助けると言っていたが、あの様子では何かの手を打つつもりもないらしい。

米利刑事は意を決した表情で、真境名の方へ近付いた。

「お父さんも、この関係者だったらいいな。こんなことをして、ご両親に申し訳ないとは思わないのか」

真境名は顔を上げ、米利刑事の方を見た。

「今更泣き落としですか。流石に古すぎですよ」

真境名は両肩をすくめた。これ以上はコミュニケーションをする価値もないと判断したのか、それつきりですっぽを向いた。雨に煙る街や海を見下ろしている。米利刑事は「くそ。ダメだったか」と、本気で残念そうに肩を落とした。織林刑事はそれを見て、「当たり前ですよ。何、考えてんですか」と厳しい口調で言う。二人とも、雨に打たれて久しく、どちらも頭の上から足の先まですつかりずぶ濡れになっている。

真境名の横で、彼の行動に付き合わされている桂花さんも、それは変わらない。雨雲で陽が翳ったせいで、元々の肌寒さがより一層強まっている。強い風が吹けば、体温はどんどん失われていく。

僕が見ているのを察したのか、真境名は桂花さんの手を引いて歩き始めた。ハシゴの方へ向かっているらしい。桂花さんはささやかな抵抗を続けるが、彼に腕を引かれているせいで、引きずられる格好になる。

僕はカバンの中を探り、折り畳み傘を掴んだ。右手にそれを持ち、両手を頭の上に上げる。何も持っていないことをアピールしながら、二人の方へ近付いた。

僕の接近に気が付いていた真境名は足を止め、こちらに振り向いた。

「今更、何の用だ？」

「傘ぐらい、持っていけばどうかと思って」

僕は真境名に向けられた銃を警戒し、少し離れたところで立ち止まった。

「そんなガラクタ、今更要らん」

彼は僕の持っている傘が、中程から折れ曲がっているのを、しつかり確かめた。その目で、桂花さんの顔を見る。

「お前の形見として、受け取ってやろう」

真境名は銃を持ったまま、床を差した。僕は彼に視線を定めたままゆっくりしやがみ、傘を足下に置いた。彼は「そうだ。それでいい」と言い、僕に下がれと手で合図した。僕は、傘を置いた場所から二、三步下がった。

真境名は、桂花さんの背中に銃口を当て、彼女を傘の方へ押した。

「取りに行け。ほら」

彼女の背中に狙いを定めたまま、彼女を先に歩かせる。彼女が傘へ近づくと共に、真境名も徐々に近付いてくる。自信に満ちた、実に悠々とした足取りだった。

桂花さんの顔を見やると、力強い目でじつと僕を見つめていた。僕と視線がかちあうと、彼女は身を低くしてコチラに走り寄った。不意を突かれた真境名は

「くそつ、コイツ」と叫び引き金を引くが、近くへ落ちた雷に視界を奪われ、桂花さんの足首を撃つのが精一杯だった。僕の後ろで構えていたらしい、米利刑事、織林刑事の銃が桂花さんの逃亡を援護する。そのうちの一発が真境名の右肩を撃ち抜いた。

僕は足首を撃たれ、目の前に倒れている桂花さんに駆け寄った。彼女は、撃たれた箇所を手で押さえながら、もう片方の手で僕がそこへ置いた傘を引き寄せた。

「あとは、頼んだ」

彼女は僕の胸に折れた傘を押し付ける。僕は意味が分からないなりに、それを受け取った。後ろから、米利刑事、織林刑事が駆け寄ってきて、僕らを守ろうと前に出る。肩を撃ち抜かれた真境名は体制を整え、銃を左手に持ち替えていた。

激昂した様子で、呼吸も荒い真境名は銃を構え直し、銃口をコチラに向けた。

「この野郎っ！」

米利刑事は一気に距離を詰め、真境名の腰にタックルを決めた。狙いを外した銃弾は、織林刑事の前髪を打ち抜き、空中へ抜けていった。織林刑事は、雨で足を滑らせ、仰向けに倒された真境名の動きを止めるべく、米利刑事のサポートに回った。

「ほら、早く」

桂花さんは、ボサッと突っ立っている僕の背中を押した。僕は傘の折れた骨組みをじつと見つめ、二人に抑え込まれている真境名に視線をやった。僕は傘を床

に叩きつけ、余計な部分を取っ払う。

「脚を抑えて」

僕は、暴れる真境名を押さえつける二人に、追加の注文を叫んだ。米利刑事は「何、脚だ？」と文句を言いながら、織林刑事との連携の末、なんとか右足を抑え込んだ。僕は雄叫びを上げ、途中折れて鋭利な切断面が出ている取手の先を、固定された真境名の足を目掛けて突き刺した。足裏、土踏まずのところに、グリップの部分を残して深々と入っていった。

真境名の悲鳴がそこら中に響き渡った。まだ息はあるようだったが、暴れる体力は無くなつたらしい。大人しくなつた真境名を米利刑事が一人で抑え込んだ。

「時間がないよ。ほら、早く」

真境名に留めを刺して放心していると、立ち上がった桂花さんが僕に声をかけてきた。彼女は何の躊躇いもなく、僕が突き立てた傘を引き抜く。真つ赤に染まつた鉄の棒には、真境名の血や肉片が付着していた。

彼女はそれを、僕の右掌に擦り付け、柱の方へ向けて僕の背中を押し出した。

「いいから、走れっ」

僕にそう命じた彼女も、鉄の棒を投げ捨て黒い柱に向かって走り出した。足首を負傷しているとはいえ、彼女の方がやっぱり足が速い。彼女はハチ公の操作パネル側に回り、僕をカードリーダーの方へ行けと顎で示した。

僕はまだ事態が飲み込めない状況の中、このカードを取り出して、真境名の血がこびりついたままの右手で、カードリーダーにそれを押し当てた。一瞬、ハチ公の目が小さく光った。

初出 令和四年一月二日 noteにて公開